

アメリカ例外主義：狂った国家的プライド

Greatchain

2018/5/23

アメリカ例外主義（思想）American Exceptionalism という、アメリカを精神的に支えてきた信念があって、これが諸々の禍の根源となり、世界を苦しめてきた。たとえそれが幻想だったとわかって、それは確信犯的に信じ続けられ、捨て去られることはなさそうだ。日本で言えば大和魂に当たるかもしれないが、大和魂には、アメリカ例外主義のような傲慢で戦闘的などころはない。それはどういう思想かというと、アメリカだけは、世界の他の国と違って、強大な特権が与えられていて、世界を指導し、命令することができる。それだけでなく、国際法も、国内外の倫理道徳も超越している、という確信である。あるいは神話である。

わが国のメディアも、基本的にこの神話を認めており、諸々のアメリカの行為が明らかに犯罪であっても、絶対にそうとは言わない。それは、世界の指導者であり権威者であるアメリカが、悪事を行うことなどありえないという、信念からきているのであろう。そして我々一般大衆も、ほとんどそのように信じている。

The Saker——あのダイヤモンドバックというガラガラ蛇について、唸るような名論文を書いた論客——が、「アメリカ例外主義：破壊的なエリート精神 vs 建設的な人間性」という論文を書いており、この思想についてこう言っている (21stcenturywire.com)：——

表面的には、アメリカ例外主義は、大胆に主張された概念のように見える。しかし、個人的経験の機微や、歴史の教訓や流れ、個別の地理的におかれた場所などに、照らしてみれば、それは恐ろしく狭小な精神からくる、欺瞞的な、狂った権力亡者君主の、家来に対する態度としか考えられないものである。

そして、2004年のニューヨーク・タイムズのある論文を引用している：——

(アメリカ例外主義とは) それは今や一つの帝国であり、我々は行動しながら、自分自身の現実を創り出していく。そして、あなた方が賢明にも、その現実を研究している間に、我々は再び行動し、別の新しい現実を創り出しており、あなた方はそれをまた、研究することができる。そのようにして物事が出来上がっていく。我々は歴史の主役であ

り、あなた方すべては、我々がなすことを研究するだけでよい。

これは傲慢と驕慢を絵に描いたような文章である。とうてい正気とは思えないが、それが現在までの犯罪的アメリカを創り出していると考えれば、納得がいくではないか？

また、オバマ大統領は、2009年のNATOサミットでこう言っている：――

私はアメリカ例外主義を信仰しています。我々はコアとなる価値のワンセットを持っており、それは我々の憲法の中に、法律の総体や、我々の民主的な習慣、また言論の自由と平等への信念の中に、祭られています。それは不完全とはいえ、他にはない例外的なものです。

オバマは2014年、ウェストポイント（陸軍士官学校）の卒業式でもこう話した：――

アメリカは、常に、世界の舞台でリードしなければならない。…アメリカ合衆国はただ一つの、なくてはならない (indispensable) 国家です。…私は、私の全存在をもって、アメリカ例外主義を信じています。

このオバマの信念は、そっくりそのまま、わが国のメディアの信念であろう。役者から大統領になったロナルド・レーガンも、1974年、第1回保守政治行動集会でこう話した：――

我々は、我々の運命 (destiny) から逃れることはできません。またそうすべきでもありません。自由世界のリーダーシップは、2世紀前、フィラデルフィアのあの小さなホールで、我々に強制されたものです。・・・[訳者：この destiny という言葉は、Manifest Destiny (明白な運命＝アメリカ人が大陸の土着民を追い払うのを正当化する標語) として使われており、レーガンは明らかにそれを匂わせている。]

法王ピウス12世は、「アメリカ人民は、輝かしい非利己的な行動の、偉大な才能を持っている。神は、アメリカの手に、虐げられた人類の運命を委ねられた」と言いました。

その通りです。そして我々は今日、この地上で、人間の最後の最大の希望です。

レーガンはそう信じ、そう言った。しかし、その真逆のことが起こった。明らかにアメリカは、今世紀以来、人類に希望でなく、最大の苦悩と絶望を与えている。なぜか？ それは、エドガー・ケイシーが予言したように、アメリカは、神への信仰 (In God We Trust) を、完全に捨てたからであろう。 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180514.pdf>

我々が自分や、自分の国のあり方を決めるとき、自分を中心にして決めることはできない。何らかの自分を越えたものへの信仰が、背後になければならない。神への信仰がわずかにでも残っている間はよい。しかし、それが完全になくなったとき、背後に、信ずべき何が残っているか？ それは神ではないもの、すなわちサタンでしかない。そのとき、神信仰からサタン信仰への激変が起こると考えられる。あるいは、その変化がいったん起こると、それは急激に悪化する——“純粹悪”へと真っ逆さまに墜落する——と考えることができる。それが今、かつて希望の灯だったアメリカに、起こっていることではないだろうか？ なぜ、これほどの信じられない悪が蔓延するか？

我々が自分や、自分の国のあり方を、誇りに思い、世界の指導者として自覚するということ自体が、悪いわけではない。しかしそれは、武力や権力の強大を誇るのではなく、いかに道徳的に優れているかを、世界から認められた場合だけである。「桃李は言わざれども、その下おのずから小径をなす」場合だけである。オバマのように、国連の場で、ことさら自分の国を宣伝したり、NY タイムズ論文のように、「我々から学べ」などというのは、全く見当違いのことである。

——以上